

論文審査結果の要旨

本論文は、wh 移動、焦点化移動、話題化移動等の様々な左方移動を伴う構文に着目し、その特性と移動の相互作用による文法性を原理的に解き明かしたものである。wh 移動や焦点化移動、話題化移動などの左端への A' 移動は、文脈上重要な要素を左端に移動することで、統語構造と意味/音との対応を容易にする働きがあると考えられるが、本論文は、さらにその移動先が移動要素の種類に従って細分化されているとする階層化 CP 仮説 (Rizzi (1997)) の妥当性を広範な言語事実に照らして、実証的に検証したのものである。生成文法理論における近年のミニマリストプログラムのフェーズ理論においては、節頭の CP 領域と節内の vP 領域が派生の単位であるフェーズを構成すると考えられており、①フェーズ主要部による操作の同時適用、②CP 領域と vP 領域の並行性の理論的意義が注目されている。本論文は、この2つの可能性を探求し、要素の移動と抜き取り現象を移動要素の素性に相対化した派生的に生じる介在効果に基づき説明している。それにより、従来の階層化 CP 仮説の不備を改善し、さらに vP レベルでも同様の現象が働くことを重名詞句移動、there 構文、場所句倒置構文などで見事に実証している。

本論文の第1章では、本論文で扱う移動の介在効果現象と階層化された CP 領域の仮定を概観した。第2章では、イタリア語、英語、日本語における wh 句、焦点要素、話題化要素の相対的語順を検証し、通言語的に階層化された CP 構造が支持されることを示した。さらに、階層化された構造は CP 領域だけでなく、vP 領域にも存在すると示すことで、CP フェーズと vP フェーズの並行性を経験的に支持した。

第3章では、単一文に2種類の移動が生じる場合の介在効果を素性基盤の派生最小性を提案することにより統語分析した。その際、Rizzi (2004)による素性クラス分類に従い、wh 要素と焦点要素は数量化クラス、話題化要素は話題化クラスに属すると仮定した上で、素性基盤の派生最小性の原理を提案した。これは、同じ素性クラスに属する要素同士が移動する場合、階層化された CP 構造において下位に移動した要素は上位に移動した要素の移動を阻害しないが、上位に移動した要素は下位に移動した要素の移動を阻害するという原理である。

第4章では、イタリア語、英語、日本語における A' 移動の介在効果現象を精査し、素性基盤の派生最小性が広範な介在効果の事実を説明できることを示した。さらに、第5章では、分離 A' 移動という新たな移動操作を提案することで、移動要素からの抜き取りに見られる介在効果を素性基盤の派生最小性により統語分析した。

第6章では、階層化された vP 領域の仮定を援用し、これまで移動の介在効果により説明されることがなかった英語の焦点化構文(重名詞句移動、there 構文、場所句倒置文)を素性基盤の派生相対的最小性の原理により説明した。

第7章では、これまで明確にされていなかった階層化された CP 構造の形成方法に関し、Chomsky (2012)のラベリングの仮定と主要部移動の考えを組み合わせることで新たな提案を試みた。これは、言語のフェーズ領域の階層性が、経験的根拠だけでなく、理論的にも支持される可能性を示唆するものである。

第8章では、本論文の主張と前章までの議論を要約し、本論文の生成文法理論研究における意義を示した。本論文は、主に左方移動と移動の着地点の階層構造の実証的研究であるが、本研究の成果は、フェーズ理論の妥当性を検証するのみならず、統語派生の局所性ならびに、統語派生と意味解釈のインターフェイスのメカニズムの解明に関する重要な分析として、生成文法における理論研究に大きな貢献をするものと高く評価することができる。

以上のことから、本調査委員会は、本論文の提出者が博士 (文学) の学位を授与されるに相応しいと認めるものである。